平成 18 年度日本光学会総会

平成 18 年度総会は，2007 年 3 月 28 日（水）に青山学院大学において開催された
まず，伊東一良幹事長より挨拶が行われたのち，今年度の動向について説明があった．

2006 年度に，日本の地で Nature Photonics が創刊された．この意義は大きいが多様であるので，ここで議論するには時間が不足である．しかし，これを機会に日本のフォトニクス界へ の世界の注目度が今後さらに高まることは，間違いないと思われる．さて，日本光学会の会員数であるが，本年 1 月末現在で，A 会員 727 名，B 会員 1029 名，特別会員（光学，OPTICAL REVIEW 購読口数）167 口となっている．冒頭の事実とは裏腹に，ここ数年減少または停滞が続いている．明確な理由はまだ不明である．日本光学会では 本年度から，会員の満足度を高め，自然と会員が増えていくような体制を目指して，会員増計画を進めている．

2006 年度の講演会活動を順に紹介する．第 31 回光学シンポジウムが「光学システム・光学素子の設計，製作，評価を中心として」と題して，6 月 22，23 日に，東大生研コンベンションホールで開かれた．講演件数は 25 件，参加者数は 351 名と盛況であった．いろいろなところで，光学技術者の不足 を耳にするが，このシンポジウムが光学技術者の育成・情報交換の場としてより有効に役立っていくことを期待する．サマーセミナーが第 40 回の節目を迎 え，8 月 4，5 日に「命と光 －光学とバイオ・医療の関係－」をテーマに富士教育研修所(静岡県裾野市)において開催された．ナイトセッションや講師の方との交流など，一般の講演会や セミナーには見られない催しが好評であった．

日本光学会年次学術講演会のネーミングが，Optics & Photonics Japan 2006 と改められ，学術総合センター（一橋記念講堂）において，11 月 8～10 日の 3 日間にわたって開催された．テーマの「“光のシナジー”を求めて－ 隣接学会，隣接国との協調と競争－」にもあるように，講演会の国際化が図られた．中国，台湾，韓国からの 4 名の新進気鋭の研究者らによる国際シンポジウムが開催され，北京大学，国立台湾大学，KAIST などのアジア各国の第一線の研究成果が紹介された．他の新しい試みとしては，学術講演会が分光学会との共 催となり，合同シンポジウム「分光学と光学の融合と協調」が開かれた．

目新しい企画としては，セラミックスレーザーの国際会議，LCS2006 の一部が，「セラミックスレーザー国際シンポジウム」として開催され，日本眼光学 学会との合同企画シンポジウム「最近の眼科測定装置」が開かれた．日本光学会産官学連携委員会が企画したシンポジウム「日本光学会における”場”の変革に ついてかんがえよう?21 世紀の知的創造に向けて?」が開催され，産官学の連携や強調のあり方が議論された．展示会出展企業によるランチョンセミナーや， 企業との共催のセミナーと連動した「OPJ2006 プレセミナー」，「フォトニックナノ構造の設計と応用展開」というふたつのプレセミナーも試みられた．

第 33 回冬期講習会は，「光診断と光治療の最前線」と題して，1 月 11，12 日の 2 日にわたって東京大学山上会館で開かれた．光の役割に期待が集まっている分野だけに，会場では光の技術

を利用する側と提供する側の間で熱心な質疑応答がなされた

北陸，北海道，関西，名古屋の各地区で講演会が開催され，他学会との共催事業としては，3次元画像コンファレンス 2006 が 7 月 6，7 日に，カラーフォー ラム JAPAN 2006 が 11 月 27～29 日に，第 40 回光学五学会関西支部連合講演会が 1 月 27 日に開かれた.

出版関係では,「光学」 Vol.35 No.4～Vol.36. No.3(12 号）が,「OPTICAL REVIEW」 Vol.13 No.2～Vol.14 No.1(6 号)が出版された. また，日本光学会のホームページがリニューアルされ，会員の利便性が大幅に向上した.

総会に先立ち平成 18 年度光学論文賞授賞式が行われ，田中拓男氏(理化学研究所)と王?氏（電気通信大学）に授与された. また，日本光学会奨励賞は，堀泰 明氏（産業技術総合研究所）と渡邉恵理子氏（日本女子大学）に授与された. 2 年目を迎え，名称も改まったOptics & Photonics Japan ベストプレゼンテーション賞は，奥田洋志氏（慶應義塾大学），山内豊彦氏（浜松ホトニクス），寺川光洋氏（慶應義塾大学），川口拓之氏（慶應義 塾大学），堀崎遼一氏（大阪大学）. 段 志輝氏（電気通信大学）の 6 氏に贈られた. 受賞された各氏の今後のご活躍を期待する.

国際関係では，SPIE（国際光工学会）の Paul F. McManamon 会長が Eugene G. Arthurs 事務局長とともに日本を訪れ，日本光学会の正副前幹事長，日本光学会の SPIE Fellow などと情報や意見の交換を行った. 特に最近の理科離れについて，緊急の問題であるとの共通の認識を確認し，今後継続的に情報交換を行うことを 約束した.

続いて，吉田庶務幹事（総務）より平成 18 年度事業報告および平成 19 年度事業計画，石橋会計幹事より平成 18 年度決算報告，豊田会計幹事より平成 19 年 度予算案が提示され承認された. 総会終了後，田中・王両氏による光学論文賞受賞記念講演が行われた.

なお，日本光学会の平成 18 年度事業および平成 19 年度の計画等に関する情報は，第 36 巻第 7 号の「日本光学会平成 18 年度年次報告」の中に詳細が掲載される予定である.